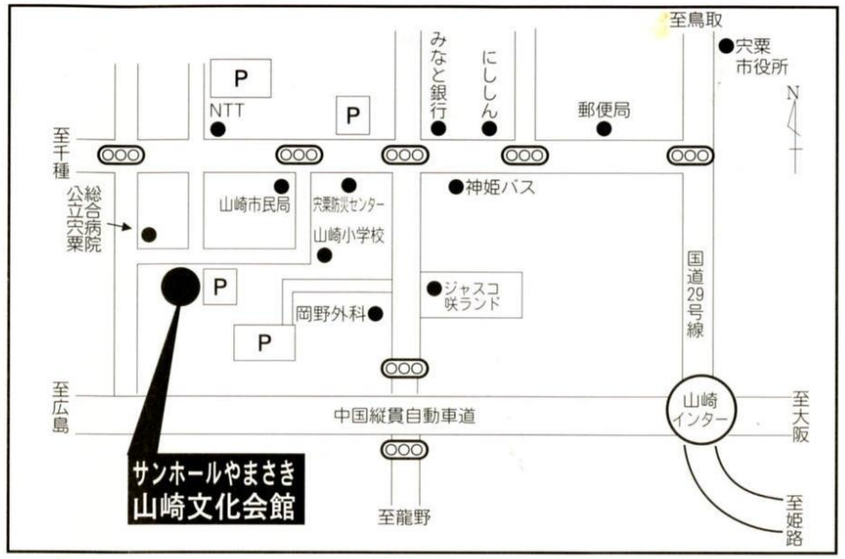
宍粟市誕生記念

第二回 山崎能

と　　き	平成17年9月3日（土）
と こ ろ	サンホールやまさき（山崎文化会館） TEL 0790（62）5300
第一部	宍粟市謡曲同好会　午後2時始
第二部	山　崎　能　午後5時30分始
主　　催	山崎能実行委員会
後　　援	宍粟市・宍粟市文化協会・宍粟市教育委員会・神戸新聞社・山崎町商工会・龍野ロータリークラブ・山崎ライオンズクラブ・宍粟郡医師会有志・宍粟郡歯科医師会有志・山崎茶華道協会
協　　賛	宍粟市謡曲同好会

入場無料

《会場略図》



事務局
山崎町山崎6（山中医院内）
山崎能実行委員会
TEL（0790）62－0036

宍粟市誕生記念

第二回山崎能開催に当り

昭和五十五年十月に第一回山崎八幡神社奉納薪能を上演してから通算すると今年は二十五年目に当り、回を重ねること十四回となりました。

日本伝統の芸能の中でもとくに高い地位を占めている能楽を、この山崎町で斯界最高の能楽師を揃えて、このように長い間続演できましたことは、故壷阪壽初代薪能奉賛会長、故江崎庄左衛門師を始めとし、御協力をいただいた日本能楽協会、地域の皆様と同好の方々の幅広く、熱心なご支援の賜と深く感謝申し上げる次第です。

前回第十三回からは山崎町の後援を得て、第一回山崎能として事業を引き継ぐことになりました。殊にこの度は宍粟市誕生の年にあたり、NHK大河ドラマに因んだ「船弁慶」を始め、漢の高祖の軍師張良が黄石仙士から治国平天下の兵法奥義を授けられた物語を題材とした能楽「張良」を、又大蔵流狂言は九十歳を超えてなお矍鑠として舞台に立っておられる茂山千作師の至芸を拝見することとなっております。

初秋の一夜を皆様と共にすばらしい日本の伝統芸能の鑑賞に過ごすことを楽しみにしております。

山崎能実行委員長　山中陽一

第一部 宍粟謡曲同好会番組

（午后 二時 始）

一、連　吟・秋田泉謡会

経

シテ竹内 俊延
ワキ中村 明
中村 裕美
丸山 央
蒲田 哲子
秋田美恵子
中村 清子
中山 昌子

二、連　吟・宇田唱謡会

蝉丸

ツレ山国 友子
シテ西嶋 繁子
宇田 八代
長田 豊彦
宇田 渡
藤井 裕

三、連　吟・内山北露会

通盛

ツレ伊藤 弘之
シテ梶浦 忠志
ワキ秋武 春生
内山 正作

四、連　吟・波賀翠謡会

鵜飼

岡田 薫
松本 繁信
中田 勇
大成みちよ

五、仕　舞・鶴崎観和会

高砂　春名 芳子
嵐山　田中 洋子
蝉丸　山國 重代
玉鬘　鶴崎 智子
鞍馬天狗　永井由美子
小寺 寿子
鶴崎 和美
竹添 斉

六、連　吟・山崎集杉会

頼政

中谷 裕子
山根 悠子
玉田 敬子
名賀美小夜
吉川 宏美
岸本 通哉
加藤 昭彦
塚田 清一
山中 陽一
三谷 恭三
三渡 圭介

七、独　吟・山崎福王会

藤戸　葭谷 驍

八、仕　舞・山崎篠謡会

嵐山　原 忠雄
屋島　上田 隆雄
蝉丸　山崎きよ子
原 みち代
宮本 弘子
坂根文美子
進藤ヒデ子

九、連　吟・池田掬水会

野守

シテ柳田 薫
ワキ山田 雄三
久宗 丑雄
大部 満男
伊野 操治
安田 武嘉
石野 敏郎
春名 一利
橋本 喜造

〈お知らせ〉

当日 一階ロビーに於いて、山崎茶華道協会のご協力によりお茶席を設けています。皆様のご来席をお待ちしております。

（午後一時三十分～午後五時三十分まで）

第二部　山崎能

午后 五時三十分 始

能・狂言鑑賞講座「狂言 泣・笑」　茂山七五三

舞台改め　山崎能実行委員長　山中陽一

観世流　能楽

張良

笠田昭雄　藤井徳三　辻雅之　上田慎也

間　茂山茂　江崎敬三　清水晧祐　赤井啓三

後見　木内十三比古　地謡　上田宣照　吉井基晴　梅谷宏　上田拓司　久保信一朗　笠田稔　平野元章　松野浩行　山田義高

挨拶　山崎能実行委員長　山中陽一

祝辞　兵庫県議会議員　長田執

祝辞　宍粟市長　白谷敏明

大蔵流　狂言

貰聟（もらいむこ）

茂山千五郎　茂山七五三

茂山千作

後見　井口竜也

観世流　能楽

船弁慶「前後之替」

笠田護　杉浦豊彦　松本義昭　辻芳昭

間　茂山七五三　江崎金治郎　和田英基　清水晧祐　上田悟　野口亮

後見　吉井基晴　梅谷宏　笠田昭雄

木内十三比古　地謡　久保信一朗　山田義高

松野浩行　上田拓司

上田大介　田中章文

閉会の辞　山崎能実行副委員長　鶴崎和美

終了　午后八時半 頃

※会場内での写真撮影・ビデオ録画、テープ録音は、堅くお断わりいたします。
また携帯電話は電源をお切りください。

お祝いのことば

宍粟市長　白谷敏明

庭にすだく虫の声も夜ごとにしげく、黄金色の稲穂が揺れる実りの秋となりました。

本日、「宍粟市誕生記念山崎能」が厳粛かつ盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

山崎八幡神社の歴史ある能舞台で昭和五十五年より始められ、今回は文化会館で「山崎能」として第二回を迎えられましたこと、山崎能実行委員会の皆様を始め、関係の皆様方のご努力の積み重ねに対して、深く敬意を表します。

めまぐるしく変容する今日の社会において、人々の価値観も多種・多様化し、地域の連帯感も希薄化しており、今ほど「心の豊かさ」が求められているときはないと思います。

ここにご参集の皆様は、日頃より伝統芸能や文化を愛され、充実した人生をお過ごしのことと思います。さらに、文化活動を通して、多くの人々と出会い、交流を深められ、地域づくり、人づくりを実践されており、誠に意義深く、素晴らしいことであります。

今宵は、夜長月のひととき、幽玄の世界を楽しみ、何世代にもわたって磨かれてきた伝統芸能に、ともに感動をあじわいたいと思います。

「山崎能」が今後さらに隆盛発展されますことを祈念いたしまして、お祝いのことばといたします。

お祝いのことば

兵庫県議会議員　長田　執

暑かった夏も終りを告げ、虫の声に秋の訪れを感じる頃となりました。

本日は、一昨年新らしく第一回として出発されました山崎能の第二回が開催されることとなり、誠におめでたく心よりお祝い申し上げます。

山崎における能楽公演は古く、昭和五十五年に八幡神社へ奉納する薪能を薪能奉賛会の皆さんが計画され、山崎八幡神社の由緒ある能舞台で開催されて以来二十五年の歳月の中で、過去十三回に及ぶ公演が続けてこられました。

能や狂言は、その時々の時代背景を映し出しながら六百有余年の長い歴史と伝統を持った、我が国が世界に誇る偉大な古典芸能であります。

昔から日本に伝わる有名な物語を題材としてその主人公の霊を蘇らせ、研ぎ抜かれた技でこれを演じる事により、一挙に観客を数百年の昔に引入れるという正に時空を超えた幽玄の世界と言われる所以であります。

現代の社会は、目に見える物や科学で推測出来る物以外は価値がないような風潮となっておりますが、やはり、目に見えないもので人間の知恵を遥かに超えた計り知れない世界があることを、鍛錬に鍛錬を積んだ能楽師の演ずる「能」と言う芸術を仲立ちとして知って貰えれば、そして、これらに対する畏敬の念が芽生えれば大きな成果となるのではないかと思われます。

今年の四月には、宍粟郡四町が合併して宍粟市が誕生しました。市内各町に創られているたくさんの謡曲同好会は、年に一回大会を開催して常日頃の研鑽の成果を発表されながら活発な活動をしておられます。

これらの集大成として隔年に実施されて来た通算十四回目を迎える今回の能公演であります。

今日は、たくさんの宍粟市民の皆さんと共に、先生方の研ぎ抜かれた技を心ゆくまで楽しませて貰います。

山崎能の限りないご発展を祈念してお祝いといたします。

演目解説

観世流

能楽 張良（ちょうりょう）

漢の高祖の臣である張良（ワキ）は、ある夜不思議な夢を見ます。それは張良が下邳（かひ）というところにある土橋で馬に乗った老翁に会ったところ、その老翁が左の沓を落し、それをとって履かせろというので、老人を敬ってはかせると、老翁は汝は誠意のある者であるから、今日から五日目にここで兵法を授けようと告げる夢でした。張良がその五日目に土橋へ行ってみると、老翁（前ジテ）はすでに来ていて、張良が時刻に遅れたことをとがめ、さらに五日目の夜更に会うことを告げて姿を消してしまいます。

《中入り》

その五日後、張良は深更に出かけて待つと、馬に乗った黄石公（こうせきこう）が威風あたりを拂う様子であらわれ、張良の人柄をほめますが、なおもその心をためそうとして、履いている沓を川に落します。張良はそれを取ろうとしますが、流れが急で取ることが出来ません。その時波間に大蛇（後ヅレ）が現われて沓を取ったので、張良は剣を抜いて大蛇に向かい、沓を奪って石公に履かせます。そこで石公は張良に兵法の秘伝を授けます。その大蛇は、自分の観音の化身であるが、これからは汝の守護神となろうと言って天に上り、黄石公ははるかの高山に登って、姿を黄石に変えました。

大蔵流

狂言 貰聟（もらいむこ）

酒ぐせの悪い男に愛想を尽かした女が子供を残して実家へ帰ってしまいますが、結局よりを戻すという、いわば世話物（ホーム・コメディ）的な狂言です。泣く娘をなだめる父親、酔いが醒めてひたすら詫びる男、そして最初の勢いはどこへやら、いつの間にか夫と子供への愛情から親を振り切って男のところへ戻る女。最後の争い、留めの舅のセリフに至るまで三人三様の心情が十分に出ていて、狂言という簡潔な演劇の特色を、世話的な方面に遺憾なく発揮した佳品といえましょう。

観世流

能楽 船弁慶（ふなべんけい）

源義経は、平家追討に武功を立てますが、戦が終わると、兄頼朝から疑いをかけられ、追われる身となります。義経は弁慶や従者と共に都を出て、摂津国（兵庫県）大物の浦から西国へ落ちようとします。

静御前も義経を慕ってついて来ますが、弁慶は同行は似合わしくないから都へ戻すように義経に勧めて了承を得ます。

弁慶は、静を尋ね、義経の意向を伝えますが、静は弁慶の計らいであろうと思い、義経にあって直接返事をするといいます。そして、義経の宿へ着いた静は直接帰京を言い渡され、従わざるをえず、泣き伏します。名残の酒宴がひらかれ、静は義経の不運を嘆きつつ別れの舞を舞います。やがて出発の時刻となり、涙ながらに一行を見送ります。

《中入り》

弁慶は出発をためらう義経を励まして、船頭に船を出すよう命じます。船が海上に出ると、にわかに風が変り、激しい波が押し寄せてきます。船頭は必死に船を繰りますが、吹き荒れた海上に西国で滅亡した平家一門の亡霊が現れます。中でも平知盛の怨霊は、自分が死んだように、義経を海に沈めようと長刀を持って襲い掛かって来ます。義経は少しも動ぜず戦いますが、弁慶は押し隔てて数珠を揉んで祈祷します。祈られた亡霊は、しだいに遠ざかり、ついに見えなくなります。

演者紹介

◎印は重要無形文化財保持者個人指定（人間国宝）
○印は重要無形文化財保持者

シテ方（観世流）

○藤井徳三	藤井家	神戸	在
○笠田稔	上田家	神戸	在
○平野元章	大西家	堺	在
○木内十三比古	大西家	龍野	在
○杉浦豊彦	杉浦家	京都	在
○上田拓司	上田家	西宮	在
○山田義高	上田家	姫路	在
○田中章文	藤井家	姫路	在
○笠田昭雄	上田家	神戸	在
吉井基晴	吉井家	西宮	在
上田大介	上田家	豊中	在
松野浩行	林家	京都	在
久保信一朗	藤井家	神戸	在
梅谷宏	上田家	姫路	在
上田宣照	上田家	西宮	在

囃子方

大鼓

○辻芳昭	大倉流	大阪	在
辻雅之	大倉流	大阪	在

小鼓

○清水晧祐	大倉流	大阪	在

太鼓

○上田悟	金春流	大阪	在
上田慎也	金春流	大阪	在
笛			
○赤井啓三	森田流	宝塚	在
野口亮	森田流	神戸	在

ワキ方（福王流）

○江崎金治郎	江崎家	姫路	在
江崎敬三	江崎家	姫路	在
和田英基	江崎家	姫路	在
松本義昭	江崎家	有年	在

狂言方（大蔵流）

◎茂山千作	茂山家	京都	在
○茂山千五郎	茂山家	京都	在
○茂山七五三	茂山家	京都	在
茂山茂	茂山家	京都	在
井口竜也	茂山家	京都	在

アナウンサー　清水有子

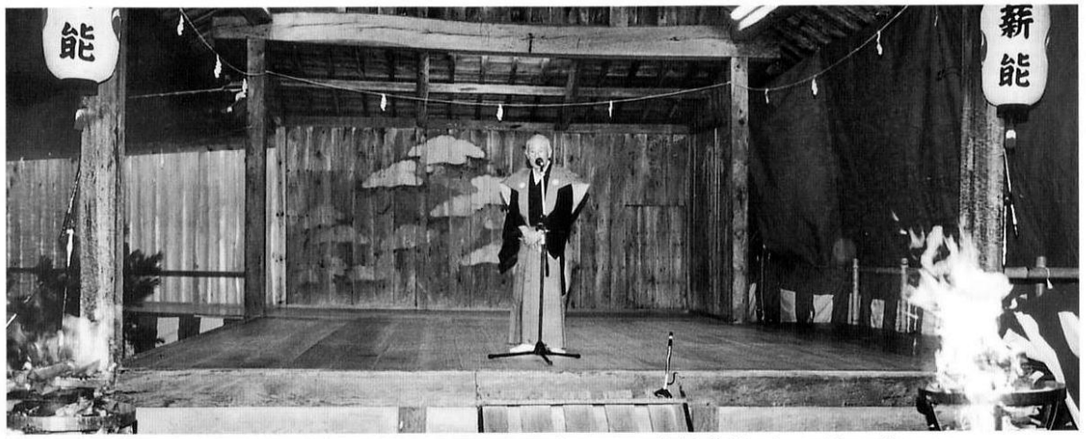
※当日、ロビーにて楠本能白氏一門による能面展示会が催されますので御覧下さい。

八幡神社奉納薪能の記録

回	年月日	演目						
1	昭和55・10・4	観世流 羽衣	狂言 柿山伏	観世流 土蜘蛛				
		江崎金治郎 上田照也	茂山千五郎 茂山正義	江崎康雄 杉浦元三郎				
2	56・10・24	観世流 鉢木	狂言 瓜盗人	観世流 紅葉狩				
		江崎金治郎 上田照也	茂山あきら 茂山正義	江崎康雄 杉浦元三郎				
3	58・10・1	観世流 三井寺	狂言 水掛聟	観世流 小鍛冶				
		江崎正左衛門 浦田保利	茂山千五郎 茂山あきら	江崎金治郎 大西智久				
4	60・10・5	観世流 弱法師	狂言 昆布売	観世流 葵上				
		江崎正左衛門 杉浦元三郎	伊藤茂 茂山忠三郎	江崎金治郎 大西智久				
5	62・9・26	観世流 翁 観世元正 三番叟 茂山千五郎 千才観世清和	面箱松本薫	狂言 二人袴	観世流 猩々乱			
				木村正 茂山千五郎 茂山千三郎	松本雄 茂山千五郎 茂山薫	江崎金治郎 藤井徳三 大西智久		
6	平成1・9・16	観世流 菊慈童	吉井順一	狂言 呼声	観世流 石橋			
		江崎金治郎 吉井順一	丸石やすし 茂山あきら 茂山千之丞	中村彌三郎 藤井徳三 上田拓司				
7	3・9・21	観世流 経正	大西智久	狂言 瓜盗人	観世流 安達原			
		指吸雅之助 大西智久	綱谷正美 茂山正義	江崎金治郎 藤井徳三 藤井徳三				
8	5・9・11	観世流 鶴亀	井上嘉久	狂言 口真似	観世流 土蜘蛛			
		指吸雅之助 井上嘉久	木村正 茂山真吾 茂山やすし	江崎金治郎 藤井徳三				
9	7・9・2	観世流 吉野天人	坂口信男	狂言 蝸牛	観世流 野守			
		江崎金治郎 坂口信男	阿草一 高井秀規 善竹忠重	中村彌三郎 波多野晋				
10	9・9・6	観世流 安宅	大西智久	狂言 素袍落	観世流 岩船			
		江崎金治郎 大西智久	茂山千五郎 茂山七五三 茂山千作	江崎敬三 上田貴弘				
11	11・9・4	観世流 高砂	杉浦豊彦	狂言 萩大名	観世流 井筒			
		江崎敬三 杉浦豊彦	松本薫 茂山千五郎 茂山千作	江崎金治郎 大槻文蔵				
12	13・9・1	観世流 巻絹	笠田昭雄	狂言 寝音曲	観世流 俊寛			
		和田英基 上田貴弘 笠田昭雄	茂山千五郎 茂山千作	江崎金治郎 大槻文蔵 上田拓司 武富康之				
1	15・9・6	観世流 藤戸	杉浦元三郎	狂言 伯母ヶ酒	観世流 殺生石			
		江崎金治郎 杉浦元三郎	茂山千吉 茂山千五郎	是川正 杉浦豊彦				

山崎能の記録

山崎八幡神社能舞台（元禄12年〔1699〕建立）のご紹介



当舞台に於いて旧くは山崎藩主本多公の奉納薪能又、昭和55年より平成13年にかけて奉賛会による薪能が12回にわたり開催されました。
300年余の風雪にたえて尚建立時のたたずまいを十分にしのばれる長い歴史をもった由緒ある文化財です。

【お知らせ】

山崎能実行委員会を支える宍粟市謡曲同好会では、謡曲・仕舞の稽古を各社中で行なっております。稽古をご希望の方はご連絡下さい。初心者大歓迎。見学だけでも結構です。

連絡先

秋田泉謡会	大谷　正之	七二―〇一五八
池田掬水会	伊野　操二	六二―一六〇〇
宇田唱謡会	宇田　渡	六二―〇八二六
内山北露会	内山　正作	七四―〇〇二三
鶴崎観和会	鶴崎　和美	六二―〇一四七
波賀翠謡会	大成みちよ	七五―三五二三
山崎集杉会	塚田　清一	六二―〇〇六一
山崎篠謡会	上田　隆雄	六二―五三七〇
山崎福王会	葭谷　驍	六二―二七四六

（五十音順）

祝　山崎能

ご協賛者ご芳名

宍粟市文化協会様　庄　清　様
山崎町商工会様　栗山章様
龍野ロータリークラブ様　大成みちよ様
山崎ライオンズクラブ様　宇田渡様
江崎福王会様　伊野操治様
姫路薪能奉賛会様　樽岡敬祐様
龍野龍諷会様　内山正作様
新宮福王会様　藤井慧乗様
金井信治様　玉田眼科・内科医院様

※第二回山崎能の開催に当りまして格別の御理解、御協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。なお、折角の御厚意にも拘らず、日程等の都合もあり、十分な打合せもできませず、広告記事に不備が多々ある事と存じます。また、編集後に戴いた分が掲載洩れになっていることもあります。この点悪しからずお許しのほどお願い申し上げます。